RAPID W 週報
Weekly Report on Aomori Prefectural Infectious Disease
発行 青森県感染症情報センター (2006年1月13日)
(青森県環境保健ｾﾝﾀｰ内:担当 微生物部)
TEL 017-736-5411、 FAX 017-736-5419
青森県環境保健センターホームページ
http://www.pref.aomori.lg.jp/eiken/index.html

青森県感染症発生情報 (2006年第1週)

Ⅰ 第1週の発生動向 (2006/1/2～2006/1/8)

1. インフルエンザは、**五所川原保健所管内**で新たに**注意報**が出されました。
2. 咽頭結膜熱は、**青森保健所管内**で新たに警報が出されました。
3. 水痘は、**青森保健所管内**で警報が、**五所川原保健所管内**で**注意報**が引き続き出されています。
4. 伝染性紅斑は、**弘前保健所管内**で引き続き警報が出されています。
5. 流行性耳下腺炎は、**五所川原保健所管内**で新たに警報が出されました。

Ⅱ 第1週五類感染症定点把握

保健所名	青森		弘前		八戸		五所川原		上十三		むつ		青森県計		増減数
疾患番号・疾患名	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	(前週からの増減)
(72) インフルエンザ	14	1.00	31	2.07	64	4.57	82	11.71	69	7.67	16	2.67	276	4.25	111
(60) 咽頭結膜熱	8	0.89	2	0.22					1	0.17			11	0.26	10
(61) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	11	1.22	7	0.78	3	0.33	1	0.20	1	0.17			23	0.55	-6
(62) 感染性胃腸炎	35	3.89	39	4.33	20	2.22	2	0.40	14	2.33	28	7.00	138	3.29	-81
(63) 水痘	36	4.00	25	2.78	14	1.56	20	4.00	10	1.67	14	3.50	119	2.83	-29
(64) 手足口病					1	0.11							1	0.02	-6
(65) 伝染性紅斑	9	1.00	18	2.00					1	0.17	2	0.50	30	0.71	-10
(66) 突発性発しん	3	0.33	1	0.11	4	0.44	1	0.20	2	0.33	4	1.00	15	0.36	6
(67) 百日咳															0
(68) 風しん															-1
(69) ヘルパンギーナ															0
(70) 麻しん(成人を除く)															0
(71) 流行性耳下腺炎	7	0.78	5	0.56	2	0.22	25	5.00	7	1.17	6	1.50	52	1.24	17
(73) 急性出血性結膜炎															0
(74) 流行性角結膜炎					2	1.00	3	3.00	2	1.00			7	0.64	6

定点数					
保健所名	インフルエンザ(内科+小児科)	小児科	内科	眼科	基幹
青森	14	9	5	2	1
弘前	15	9	6	3	1
八戸	14	9	5	2	1
五所川原	7	5	2	1	1
上十三	9	6	3	2	1
むつ	6	4	2	1	1
合計	65	42	23	11	6

は警報　　は注意報　　「空欄」:患者発生数0

Ⅲ 表Ⅱ以外の感染症法対象疾患 (18年計には、今回届出された人数を含む)

(59) RSウイルス感染症(五類定点把握疾患)　弘前保健所管内:9人　五所川原保健所管内:4人
むつ保健所管内:5人　(18年計 18人)

(82) ﾏｲｺﾌﾟﾗｽﾞﾏ肺炎(五類基幹定点把握疾患)　八戸保健所管内:6人　(18年計 6人)

感染症の窓　感染性胃腸炎

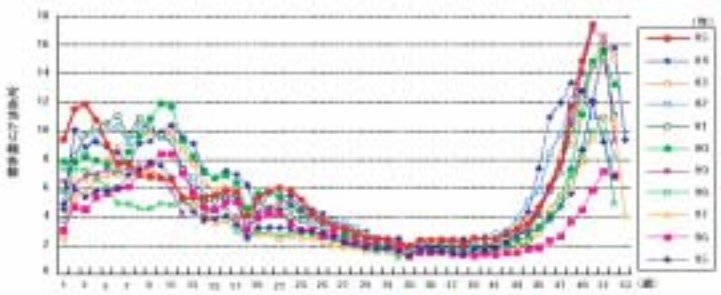

図1 感染性胃腸炎の年別・週別発生状況(1995～2005年第50週)

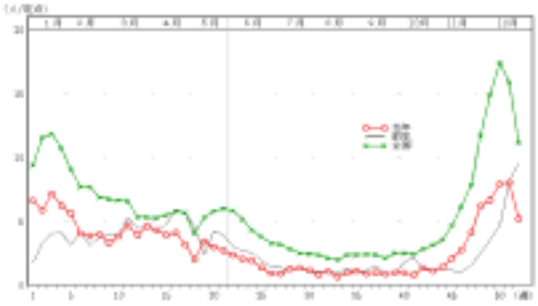

図2 平成17年定点当たり患者年次比較

全国の感染性胃腸炎の定点当たりの報告数は、第41週以降増加が続いており、第50週は1995年以降の11年間で最高値を記録しました(図1)。青森県においても第45週から第49週まで前年より多い報告数でしたが、第50週以降少ない状態で推移しています(図2)。

例年、12月の感染性胃腸炎の増加は、ノロウイルス感染症の増加と関連しています。特に乳幼児や高齢者の集団生活施設内で発生すると、人→人感染により施設内での感染拡大に繋がることが多く、感染拡大を最小限に食い止めるためには、有症状者の速やかな隔離、流水、石鹸による手洗いの徹底、吐物や下痢便の適切な処理などが重要です。また、乳幼児や高齢者が発病した場合などでは管理を厳重に行い、脱水や誤嚥には細心の注意を払う必要があります。

<参考:国立感染研究所週報第50週>